

第13回「東書教育賞」の審査を終えて

東書教育賞審査委員会

第13回「東書教育賞」を受賞された先生方に、心からお祝いを申し上げます。

この「東書教育賞」は、東京書籍の創業75周年を記念して創設されたもので、昭和60年1月に第1回の募集要項が公表されました。

その後、この賞についての先生方の関心も年ごとに高まりまして、最近では評価もすっかり定着いたしました。今回の第1部「教科指導や学校経営に関する実践部門」の応募数は、小学校92編、中学校35編で、合計127編に及んだことがそれを物語っております。

今回の課題は、「生き生きと学ぶ子どもを育てる教育実践」となっております。募集要項には、これは今後の学校教育に課せられた重要な課題であり、「この課題にこたえるべく、小学校や中学校において実践された創意工夫ある教育活動の姿が具体的に記述された論文を公募」と述べております。このような趣旨による今回の課題が、学校教育における教育実践を通じて、どのように論述されているか、私たちは強い関心を持ちました。

論文の審査にあたりましては、

- (1) 実際の実践の結果に基づいて記述され、論じられているか（実践性）。
- (2) 実践の中にどのような創意工夫が見られるか（創意性）。
- (3) 特殊な実践ではなく、だれでも応用できるような一般化への手がかりがあるか、また、子どもの発達段階や適時性への配慮が十分になされているか（一般化）。

その他、論文として体裁が整っているか。例えば、テーマと内容が一致しているか。さらに発表の範囲や字数制限などを評価の基準として設定し、慎重な審査をいたしました。

今回の応募論文では、新しい学力観に立った指導が、すべての教科にわたってさらに工

夫され、強力に進められていることが読み取れました。

進行中の中央教育審議会や教育課程審議会での討議内容を先取りする形での実践報告が数多くありましたのも今回の特徴と言えましょう。例えば、総合学習への積極的な取り組みや教科間の関連を重視した合科的学習、地域社会との連携を重視した学習、体験的学習などが目立ちました。

論文を読んでいまして先生方のご熱心さと情熱に打たれ、いかにご苦労が多かったかがわかると同時に、優劣のつけ難い力作を審査することの難しさを感じました。

それらの中から審査の結果、第1部小学校の部で優秀賞2編、佳作3編の計5編を、中学校の部では優秀賞1編、佳作2編の計3編を選出しました。

中学校の部の優秀賞は、福岡教育大学附属福岡中学校、橋口公一先生の「言語や文化に興味を持ち、自ら学ぶ力を育む英語科学習活動の創造」でした。言語や文化に関する単元は、生徒の興味・関心を喚起することが容易でない傾向があります。そこで先生は、単元の導入、毎時間の活動、単元末の各段階に応じて、生徒がとびつく学習活動や教材の開発を行いました。

導入では、ゲームやクイズで生徒の「カタカナ語」への興味を上手に引き出し、毎時間の活動では収集した資料を適切に提示し、単元末でコース別の自発的な探究活動へと生徒を導いています。その手法には無理がなく、意欲的な姿勢がうかがわれます。

コミュニケーション能力育成に直接的に迫るだけでなく、言語・文化への関心を高める必要性を説く筆者に共感を覚える先生方も多いことと思われます。

次いで、佳作の一つは、東京都八王子市立松が谷中学校、辻本昭彦先生の「エネルギーの学習における主体的な探究活動の実践的研究」であります。「むずかしい」といわれる中学校の理科の内容の中でも最右翼にあげられるのが「エネルギー」であり、特に「エネルギーの変換」は指導しにくいとされています。しかし、理科教育の方向として重要な「自ら探究し思考力を高める」や「生活との関連」などの面には非常に貴重な材料を含んでいますので、簡易な実験器具や教材の開発が望まれておりました。辻本先生の論文は、まさにこの要望にそったものであります。

材料も、ペットボトルや配線用のカバー、アルミ板、光電池用のモータなど、入手も加工もしやすく、水力発電装置、火力発電装置、ジェットコースターなど、生活とのかかわりで理解しやすいもののミニチュアで実験しています。生徒の理解も感想も上々だったと報告されていますが、さもありなんと思います。

もう一つの佳作は、北海道北広島市立東部中学校、田澤トニオ先生の「個性を再発見する器械運動一学び方の学習・選択学習を通して」です。先生の論文は、器械体操という「できる」「できない」の区別が一目瞭然な種目が陸上競技的な扱いになり、器械運動嫌いを助長している点を反省し、器械運動の特性（楽しみ方）とは何かを原点にして、指導改善を試みた長期にわたる授業実践です。

選択学習を取り入れ、それと評価を一体的に扱うことによって、生徒の主体的な態度の育成に努力している点は優れています。手作りの各種学習資料、視聴覚教材、達成カード、練習カードなどを活用した学習活動の工夫は、特にきめ細かなものになっています。生徒の反応、意欲、決断、選択などの様子がにじみ出ているところも好感が持てます。また、二つの仮説の検証が着実に行われていて、論文としての一貫性が高いものになっています。

このほかの論文にも、捨て難いものがたく

さんありましたが、次回に期待することになりました。

私たちは審査の過程で、現場の先生方によって新しい学力観に基づく実践が着実に積み上げられ、指導の工夫が多様に行われつつあることを読み取ることができまして頼もしく感じた次第です。

なお、今回の応募論文につきましても、それがまずこの賞のために書き下ろされた論文であり、規定の総字数の枠内で資料類の処理も適正になされたものであること、また、ご自分の主張が端的に示され、子どもたちの活動や変容の様子がよく描かれたものであることを、私どもは特に期待して止みません。

（執筆 奥田眞丈）

第2部「コンピュータの学習指導利用に関する部門」は、全体では昨年より6点ばかり応募点数が増えておりますが、特に小学校での増加が目立ちました。これは、まず最初に中学校の理系のほうからいろいろな試みが展開され一応一段落がついて、小学校と他の教科へ実践的な活用が広がってきたというふうにも読めるかと思います。

教育課程審議会の中間まとめの中には、情報教育の推進という姿勢が大きく出ております。4点ばかり特色がありますが、一つは、総合的な学習の時間でコンピュータ系の情報手段の活用を推進すること、二つ目は、各教科でコンピュータ等を積極的に活用すること、この2点は必ず第2部のねらいと一致しているところがございます。さらに情報教育の内容として中学校の技術家庭科に情報基礎というのがありますが、これを必修化するということです。また、高等学校では新しい教科として情報を作るという、この四つの情報教育への推進方策が提言されており、たいへん心強く思っているわけです。その際の情報を活用する能力を育成するということを目標として、三つばかり内訳を示しておられます。

情報活用の実践力、情報の科学的な理解、情報社会に参画する態度と、この3本柱がねらいになっているわけです。今回、事前審査を経て入選の候補とされた論文は合計11点でございますが、そのかなりの部分が今申し上げたような教育課程審議会の基本方針というものをふまえた内容の実践になっているように思われます。

第2部は、第1部の審査の観点にコンピュータの特性を生かした教科指導の活性化を図る実践の工夫が見られるかどうか、コンピュータを利用する教育の輪を全国的に広げたいけるような参考になる論文であるかどうかという観点を加えて審査をさせていただきました。全体の11点の特色は各教科にわたって、非常に幅広い活用がなされているということでございます。例えば校内ネットワーク、インターネットの活用、データベースを作る、ソフトを使う、あるいはゲームであるとか、教科の問題を自作するとか、多様なメディアの活用ということで、その結果、優れたものがたくさんございました。その中から優秀賞、佳作それぞれ1点ずつを選ばせていただいたわけでございます。

中学校の優秀賞は、大分県中津市立豊陽中学校、情報教育部会代表者、山香昭先生の「情報活用能力の育成をめざして一校内ネットワークの活用―」です。これは情報教育部会の先生方が全員ですばらしい実践をされています。そのうちいくつか代表的なものを選んで論文にまとめておられます。市長と直接交渉して校内LANをつけたというような、校内の熱心さが論文に現れております。

1年生の例では、生徒たちの不安や悩みをグループを編成して、それぞれ学年やクラスにアンケートを出す。また、高校の先輩であるとか、保育所の先生とかそういう人にインタビュー調査をする。調査結果はコンピュータを使ってグラフや表にする、インタビューはビデオ番組にして表現をするというような

手だてを講じておられます。ここでは人にわかりやすいグラフとか、表を作るという心配りがなされているわけです。

3年生の保育実習の例では、おもちゃを作り、そのおもちゃを持って保育所へ行き、子どもがどう遊ぶかとか、子どもの身体や運動能力などをよく調べ、その効果をコンピュータにまとめて発表するわけです。生徒がコンピュータにまとめたものをサーバーに保存することによって、他の学年の生徒たちも見られるようにしています。

サーバーへの保存は、1年生の不安や悩みの実践でも行っておりまして、保育実習を見た下級生からは保育所に早く行きたいなとか、不安や悩みの情報を見た3年生からは、かわいい不安を1年生は持っているなという感想がある、というようなことが校内に広がっていくわけです。

それから2年生で一人ひとりの生徒が自分のホームページを作るという活動も指導なさっています。リンクは先生が手伝っているようですが、とにかく一人ひとりが自分の画面を作ります。その時に著作権の重要性や、情報のモラルの大事さというものを、実践しながら学んでいく。実際にやってみて、「あっ、これやっちゃいけないんだな。今度から気をつけよう」という形になるわけです。

このように、学年を越えて情報が広がっていく、積極的に発信をする、いろいろな良さがありまして優秀賞を獲得されたわけでございます。

中学校の佳作は、岐阜県海津郡南濃町立城山中学校、田中裕二先生の「コンピュータの活用で古典学習が楽しくなる授業のあり方」です。この先生の授業はとても見事でした。古文で「矛盾」「扇の的」「奥の細道」という三つの題材での実践が取り上げられていますが、「矛盾」については4コマ漫画を作ったり、先生が作ったいろいろなことばの意味などについてのデータベースを使って学習する。

「扇の的」では群読を取り入れた授業の展開が素晴らしい。源氏と平家の掛け合いを、女性が平家だと、男性が源氏を読んで掛け合いをする。その中に効果音を入れるという使い方でコンピュータ活用されている。また、「奥の細道」では四つの班に分かれて、自分が興味のあるテーマを実践していきますが、論文では俳句検索ソフトを制作する実践が紹介されています。この論文は素晴らしい授業の中にコンピュータを取り入れて、授業をより活性化なさっているという点が評価されました。

この他にも、印象に残る論文がございましたが、こうしたすべての実践を通して私どもは、総合的な学習に向かったのコンピュータ利用というものが位置づき始めた、各教科の中で上手に活用され始めたということを感じました。特に、発信する学びといいますか、子どもが情報を発することによって学んでいく、そういう指導が充実して行われ始めてるということをつぶさに感じさせていただいた。子どもたちの学習が、受ける学び・受け身の学習から、作る学び・発する学びへと変わってきているということを感じたわけでございます。

次回以降への期待としまして、自分の実践したことをできるだけ多く具体的に書き込んでいただきたい。学者の意見の引用であるとか理論的なものはなるべく減らして、実践の前と後に付け加える程度にさせていただきたいへんありがたい。また、たくさん実践例がある場合に、それを全部並べますと分散してしまい印象が薄くなりますので、一つとか二つとか絞って書き込んでいただいたほうが、読ませていただく時に子どもたちのイメージがわいてきます。今後とも、情報活用能力を生かすような形の実践の論文が、次々と応募されることを期待いたします。

(執筆 坂元 昂)

審査委員の所感要約

(佐野金吾) 教育課程審議会の中にも中学生には表現力が不十分ではないかとか、あるいは選択の履修幅の拡大が話題になるけど選択能力があるのかというようなことをおっしゃる方がいるわけです。どうでしょうか。選択能力が無いのではなく育てられていないのです。表現力だって十分持っています。表現力が十分育つような、いわゆる学習活動が展開されていないということが言えると思います。

今回1部で入賞された方々に共通する点は、子どもの素晴らしい能力やエネルギーに十分働きかけておられ、このレポートから子どもの生き生きした姿が読み取れることです。子どもの特質と能力というものに働きかけるような授業ができれば、持っている能力を発揮できるのではないかとということを共通して感じました。

中学校で共通する点は、教科内選択です。選択能力と言われておりますが、これは選択の時間だけで身につけられるわけではありません。いわゆる各教科の時間でそういう能力に働きかけるような学習が展開されることが大事だということで、中学生の今の実態に対応した実践ではなかろうかととらえております。

特に優秀賞の英語の橋口先生に関わってお話し申し上げたいと思います。私たち教員の研究活動というものは一人ではできません。学校をあげてのそういった雰囲気というものが大事だと思いますけれども、福岡中学校では、そういう体制が取られているように思われます。英語というのは1年生で好きな子と嫌いな子に分かれてきまして、2年生の2学期になりますと決定的になります。好きな子、嫌いな子、出来る子、出来ない子になってしまふんです。これは一つは教師側の責任ではないかと思います。橋口先生は、今の生徒たちの実態に応じた、例えばカタカナのしりとりを取り入れるとか、VTRを使うとか、身

近な新聞の記事を素材として使うとか、生徒たちの興味・関心に応じた素材というものを十分活用しておられます。英語の授業というのだいたい教科書とワークがほとんどですが、生徒の実態に応じて工夫をされたということが、この優れたレポートになっていると思います。それだけではなくて、英語でカタカナしりとりとかV T Rとか身近な新聞記事を使った後にコース別の選択学習をなさっています。教科内選択です。こういうようなことをやれば、まさに英語の力も十分につきますし、選択能力も身につけられるのではないかと思います。さらにコース別の選択内容を見ますと、社会科との関わりがあります。中学校は教科の壁というものをかなり意識しますけれど、私は教科ごとに協力するということが中学校の教科の学習活動を充実するうえで大事だと思いますので、その点でも優れた実践報告ではないかととらえております。

(杉山吉茂) 私は審査をさせていただいて、全体的に見てこういうことを思いました。「実践もとても立派だな、書いてあることもとてもいいことが書いてあるな、でもそのまとめ方が残念だな」と。こういう論文が結構あったように思います。役に立つ資料としては、データがたくさんあってアイディアもたくさんあったほうがいいですし、そういう意味で評価したいと思うのですが、何となくとりとめもなくたくさん資料が集まっている、そういうようなものがいくつかあって残念だということを思いました。その点、今回入選した論文は、どれもアイディアの面でも実践の面でもよくできているし、よくまとまっていたと思います。佳作の中で、理科の辻本先生の論文を、私はとても高く評価しました。何かポイントを決めて、そして価値がわかるように書いていただけると皆さんにもわかっていただけたのではないかとと思っています。それにしてもいい実践で私もとても勉強させて

いただきました。

(多湖 輝) 私、千葉大学の附属小学校の校長を5年ほどやらせていただいて、現場のことを多少知っております立場から申し上げますが、あの忙しい中で先生方がこうやって研究論文を書いて応募されるということに、毎回とても感心させられます。今年は、どういうわけか、女性がお一人しかおいでになりませんが、いつも女性優位の状態だったような気がします。今回、男性がこれだけがんばって下さるということに非常に嬉しく思っております。

論文を読ませていただいて、大変よく工夫をしておられるし、これなら子どもが喜ぶだろうなというような感じを持って、評価させていただいておりましたが、とにかく泣かせる論文というのがあるんです。私は涙もろいほうだからそうなのかもしれませんが、読み始めたら眠気も何も飛んでしまって、最後まで読まされまして、ここまでやっている先生があるかという感動を受ける。私も子どもの時に、こんな先生についていたら、また違ったんじゃないかというような、そういう思いを感じさせる論文というのがあります。ですから、内容は十分ですから、もう少しまとめ方をうまく、審査員をみんな泣かせるような論文をお書きになれば最優秀賞が続出する状態になるのではないかと、そんなふうにも思います。

とにかく、教育界いろんな問題がまだまだございます。ポケモンの問題で、船橋のある学校で番組を見た子どもの調査をしたら、1年から4年までは、90数パーセント以上、6年生でちょっと落ち着いて87パーセントぐらいですから、ほとんど全員が見ている。そこでは数名の被害しか出なかったそうですけれども、とにかくテレビはすごい影響力を持っています。

それから、中学校の先生方が集まる会で講

演する機会があったのですが、その時に校長先生方とお話していたら、とにかく今、現場はまたちょっと荒れてきましてという話がありました。これは全部じゃなくて一部なんでしょうけれども、先生が中学生に殴られるんだそうです。相手は先生は暴力を使わないことをちゃんと知ってやる。マスコミは先生が生徒を殴ると大事件のように書き立てるけれど、先生がこれだけ殴られていても何も書いてくれないというのはけしからん、という話を聞きまして、ちょっと心配になったりしました。中学の先生方、特に体力を鍛えてがんばっていただきたいと思います。

(寺崎昌男) 最近、私感じていることがいくつかございまして、一つはあちらこちらで講演をさせてもらうときに、前は小・中学校の先生方に大学の話をするということはあまりなかった。それから大学の先生方への講演のときに小・中学校の話をしても関心を持たれなかった。ところが最近は違います。どちらで違う所の話をしても、関心を高く持ってくださる。大学の先生に、特に小・中学校の教育がどう変わろうとしているか、何が問題かという話をすると、昔はそんなこと全然聞いてくれなかった人たちがよく聞いてくれるんです。何故かというのは、非常に面白い大事なことだと私は思っているんです。

2番目は、日経連が3年前に「新時代に挑戦する大学のあり方と企業の対応」という報告書を出しました。また、去年は「グローバル化に対応する教育のあり方」という報告書を出しておりまして、これらを通して読んでみると、やはり広い規模で、新しい能力とは何なのか、新しい感性はどうつくったらいいかということについて、いわば産業界も含めて大きな問いにさしかかっているように思います。

最後にもう一つ付け加えますと、審査に当たりました中央教育研究所で去年7月から8

月にかけて、全国四つの小学校で総合的な学習をなさっているところの先生のお話を伺いました。そこでわかったことで非常に印象的なことがございました。それは、総合的な学習を先駆的になさっている所で、「ああうまくいった」と思えるのはいつかという、先生方が自分の教科の中で、そのテーマに合うのはこういう内容だから持ち寄ろうなどとやっていた間は絶対にうまくいかなかった。で、うまくいったのは子どもたちに任せようと、課題を発見するのも子どもたちだと、そこまで信頼しようと腹をくくった時に、初めて総合的な学習がほんとに生き生きと動き出したとおっしゃるんです。

そういうようなことを考えさせられている目で今回の先生方の論文を読ませていただきまして、このそれぞれのテーマと内容の中に、ここには「信頼された子どもたち」がいるということ、教科を越えて新しい力をつくりたいという意欲が通っているということでありました。

(赤堀侃司) 私は初めて審査に出させていただきましたので、感想めいて述べさせていたきたいと思います。まず、優秀賞の山香先生の論文で、中学生が保育実習に行っていることを知り、たいへん素晴らしいと思いました。行ってみてわかることがいっぱいあると思います。それは、幼児をどうやって引きつけていくかという、これを中学生がやることによって心の問題やらいろんなことを勉強すると思います。それを行きっぱなしではなく、ちゃんと後輩に伝えるという面でメディアを活用しているという、これも情報発信だろうと思いますし、また生きた学習だろうと思います。保育の実習と、メディアがうまくミックスしているというところに、私は非常に感心をしたというか勉強させていただきました。

次に田中先生の古典の学習、平家と源氏に分かれて群読する。これを見たときにふと思

いましたのは、アメリカでは、ロールプレイ
というのをやらせるんですが、これはなぜや
らせるかという、アメリカはご存じの通り、
ドラッグだとか煙草を吸うだとかいろいろな
ことが、学校の社会問題になっています。こ
れをやめるには、どうしたらいいか。いくら
説教したところで駄目ですので、煙草を吸う
ものと、吸わないものをロールプレイさせな
がら交流させて、煙草を吸う生徒の気持ちに
もなってみさせるということをやらせるん
です。そのロールプレイがかなり効果があるん
だということを研究発表でやっておりました
が面白いと思いました。あるいはネイチャー
ゲームというようなゲームもあります。実際
の木になってみるとか、自分がそのものにな
って見ることによって、その情景というもの
を理解していく、これはまさに平家と源氏で
す。そのものになって、掛け合いをすること
によって理解させていこうという方法が素晴
らしくて、私もたいへん勉強させていただきました。

全体的に、こういった優れた実践をもっと
もっと掘り起こしていかなくてはいけないと
いうのが私の感想です。参加させていただい
て、勉強させていただきましたことを、お礼
申し上げたいと思います。

＊なお、第13回東書教育賞審査委員、高杵康
雄氏は、第1部の論文審査は行いましたが表
彰式には都合により欠席されましたため、所
感の掲載はありません。また、同じく審査委
員、薩日内信一氏の所感は、小学校の論文集
に掲載いたしました。